

東福寺展

塚田 實

久しぶりに東京国立博物館（トーハク）を訪れ東福寺展を観た。東福寺は摂政九條道家が一三三六年から十九年を費やして大伽藍を築き、円爾弁円（えんに聖一國師）を開山に招いて創建された。名前は奈良東大寺の「東」と興福寺の「福」を一字ずつとったことに由来するそうだ。

東福寺には昭和の作庭家として有名な重森三玲作の庭があり、この庭を見るために度々訪れたので馴染みがある。また紅葉や新緑で有名な溪谷を見下せる通天橋には何回も訪れた。

今回の東福寺展は禅僧の画家明兆制作の「大涅槃図」と「五百羅漢図」の十四年にわたる修復が完成したことを記念して開催された。トーハクに着くと、音声ガイドのアプリをスマホにダウンロードし、再生すると補聴器に説明が流れる。

最初に円爾の像が展示され、続いて歴代の聖一派の禅僧の画像と遺偈（いげ）が紹介される。特に、臨終に際して境地を記した偈は印象的だった。文字が乱れた偈もあれば、しっかりと書かれた偈もある。高僧の強い生命力にはただただ感心するしかない。自分にはとても出来そうにない。

次に東福寺の画僧であった明兆の作品が紹介される。明兆は仏殿の様々な仕事を担っていたので「兆殿司」とも呼ばれていたらしい。高さ三二六センチの「白衣観音図」は観音の優しいお顔と洞窟らしき背景の力強い線描の対照が見事だった。

次はお目当ての「五百羅漢図」だ。明兆が三十代前半に三年以上かけて制作した渾身の作で、一幅に十人の羅漢を描き、五十幅本として描かれた。数が多いので二回展示替えをするそうだ。羅漢像の豊かな表情と極彩色の衣装の妙に魅了された。

最後は「迦葉・阿難立像」や「二天王立像」などの仏像群が迎えてくれる。仏教美術を堪能した実り多い一日だった。

明兆作の東福寺「大涅槃図」は縦約十二メートル、横約六メートルもあり、さすがのトーハクでも展示できなかったらしい。いつの日かまた京都を訪れて、この大作を实地に観てみたいものだ。